

コブシ・冬芽・毛皮

先日、大学生から質問事項が来たので、森を案内しながらお答えすることにしました。近年、灼熱のような暑い夏が昆虫などの生物や樹木に与える影響について、森の中の季節の変化と二十四節気などの伝統的な暦との相違点について聞きたいと言いました。

暦よりも暑い期間が長く、それに伴って虫の活動時期が長くなっているのか、暦上の季節と実際の季節との違いがあるのかと、その問い合わせには答えが出ませんでした。

森の中で話を続けていくうち、こずえを見渡すとコブシの冬芽が目に入りました。「コブシの冬芽がでていますね」と毛皮をまとったコブシの冬芽を見せながら、「毛皮の中にある若い葉や茎を低温から守っている」ことを説明しました。

コブシには強烈な思い出があって、自然観察指導員の腕章をし始めた頃、コブシとモクレンを間違えて伝えそうになったことがあります。これはどっちだろうと思っていたところ、先輩指導員が「モクレンとコブシの違いは、…。」と教えてくれました。「モクレンは「こう」といって、手をチューリップの花のようにすぼめ、空に向かって形を作つて示してくれました。

そして、「コブシは「こう」と今度は垂直にした手を横にぐにゃりと曲げて「横に向かっているよ」と見せてくれました。これなら「誰でもわかる」と思いました。

それ以降、コブシを見かけると手のしぐさを伝えることに加え、握りこぶしを差し出し「この握りこぶしのコブシです」と勝ち誇ったかのようにこぶしを見上げ、ジェスチャーし、伝えて、満足するようになりました。多少オーバーアクションぎみに伝え、印象に残るということも大事なのかなと思いました。

もう一つは、昨年の4月新緑まばゆいころ、駅に集合して松戸の森を3つほど案内しました。そのうちお二人の方が森を歩きながら「いい香りがする」といって、鼻をひくひくさせていました。こちらも気になって嗅覚に頼ろうとしましたが、一向に匂ってきませんでした。すると先のお二人が葉を摘みながら、「これ、これ」といって、差し出しました。コブシでした。葉も匂うことは知っていましたが、近辺を歩く人の鼻にまで香りが届くとは思いもませんでした。もちろんその二人は、植物好きであちこちの公園などのツアーにも参加する行動派の方でした。

もう一つは、本土寺です。アジサイ寺としてのほかにもサクラ、ショウブ、紅葉が見事で季節にはあふれるばかりの人で賑わう観光地です。先だって本土寺にツアーで出かけ、境内でコブシの冬芽を見かけたので、早速懐刀である、毛皮をまとった冬芽と握りコブシのはなしを広げました。そして有名なアジサイに冬芽がついていましたので、毛皮はありませんが芽鱗と花芽、葉芽についてお伝えすることができました。

（松戸市 藤田 隆）



「クマから逃げのびた人々」（ミオブックス）から学ぶこと

1 本当に正しいことは？日本の森は？

昨年、2025年の1年間、クマ（ヒグマ及びツキノワグマ）による被害が多発し、一時は連日ニュースで取り上げられていました。

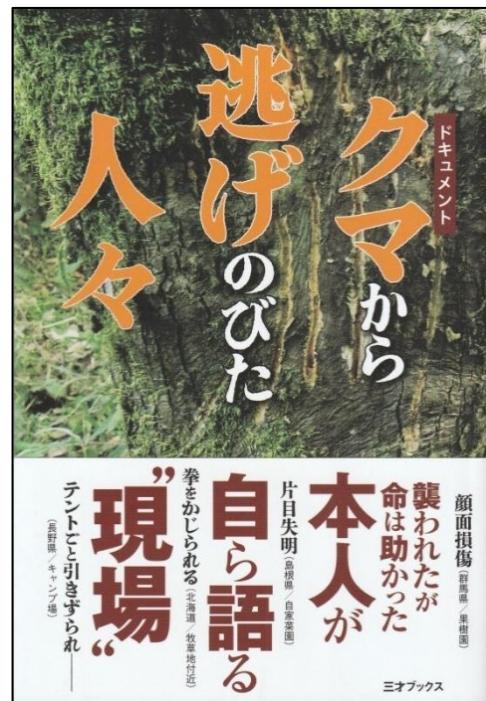
山登り愛好者としては、予てより関心を抱いていましたが、テレビや新聞、SNSなどから伝わってくるたくさんの情報を聞きするにつけて、本当に正しいことは何だろう？日本の森は今どうなっちゃってるんだろう？との疑問を抱くようになりました。

そんな折、本屋で目に留まったのが、この本でした。最初は、何か妙に刺激的で、興味本位な内容ではないかとの印象でした。しかし、思い切って手に取ってみると、目に入ったのは、東農大の山崎先生、北大の坪田先生のお名前、そして長野県軽井沢町の取り組み事例でした。

抱いていた疑問を少なからず解決してくれそう、と思って購入することにしました。

発行は2025年8月、前書きでは同年前半に発生したクマ被害に言及し、それらを踏まえて編集されています。

なお、前後して、昨年12月23日に行われたオンライン講座「野外活動中のクマ対策・予防対策を考える」（講師：東農大山崎晃司教授、NPO法人「森づくりフォーラム」主催）を受講しました。



2 クマは悪くない

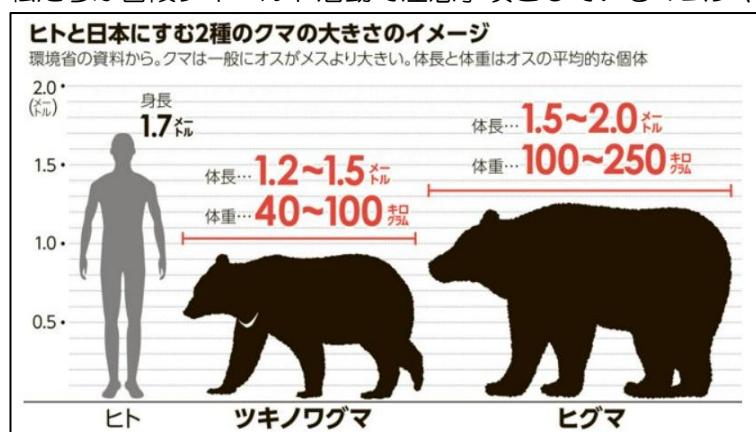
ページを割いているのは、1992年10月から2023年9月までに全国で発生した8件の事例で、極めて残忍、凄惨な状況が描かれています。

しかしそれ以上に印象的だったことは、被害者に共通するのが、クマを悪者にしていないことでした。登山や釣りなど趣味的立ち場としては、我々ヒトがクマの生息エリアに入っていくとの認識、生活や生業に直結する立場では、クマとともに生きていくとの思い、それらが語られていました。特に後者の場合では、東日本大震災の津波被害に伴って漁師の方が語っていた「海と共に生きていく」との言葉を思い起きました。

また、そもそもクマはヒトに対して臆病な生き物であって、ヒトを襲う理由の多くは防御的なものだそうです。そのことは考えてみれば、私たちが普段フィールド活動で注意事項としているマムシやスズメバチと同じと言えます。

ただ、クマは体が大きく、ヒトより力が強い、そして動きが驚くほどに俊敏であることが大きく異なります。

クマがヒトを襲う時に決まってくる行動は、威嚇のために仁王立ちになる、そして前脚を振り下ろすことによる一撃だそうです。その後、執拗に、顔や頭を狙って噛みついてくるそうです、それらはあくまで自己防衛のためのものだそうです。



※出典：朝日新聞サイトより

3 生息環境としての森の復活

以下の写真と文は、前述のオンライン講座の資料の一部（環境省令和4年度研修共通）です。

この資料だけで日本全国について一様に語ることはできませんが、概ね昭和30年代以前は、江戸時代を含めて大量に森林伐採が行われて、はげ山が目立っており、クマの生息環境が損なわれていたようです。一方、燃料革命以降現代社会においては、薪炭材など木材の需要が減ったことや中山間地域の過疎化や高齢化により耕作放棄地が増え、全体としてクマが住みやすい環境が増え、同時にヒトの生活空間に近接するようになってきた、と言うことのようです。



1940年代の東京都奥多摩町熱海地区



現在の奥多摩町熱海地区

近世(あるいは中世)から続いた森林の強度の利用は、1960～70年代の拡大造林期を最後の終焉を迎えた。

現在は、再生した森林が山麓の民家軒下まで続いている状況となった。クマの生息環境は限りなく人間の生活空間に近接している。

4 クマ個体数の増加

以下の図と文は、同じくオンライン講座の資料の一部です。

各都府県の推定値を積み上げていくと、2024年で最低でも45,000頭。1992年の自然環境研究センターによる推定値は8,400頭～12,600頭。その間の推移は不明ですが、少なくとも2000年代に入ってからは増加傾向にあると思われる、とのことで、クマ被害増加の一要因と言えそうです。

因みに、左下のグラフは、クマの自然増加率は1年間で20%増。10年経つと約5倍に増えることを示しています。また、昨年の捕殺数は、ツキノワグマ11,179頭、ヒグマ1,369頭です（環境省2026年1月6日速報）。これほど捕殺されていることに、正直驚きました。

➤3,565～95,112頭（階層ベイズ）（環境省2010）

➤各都府県の推定値を足しあげて 最低約45,000頭

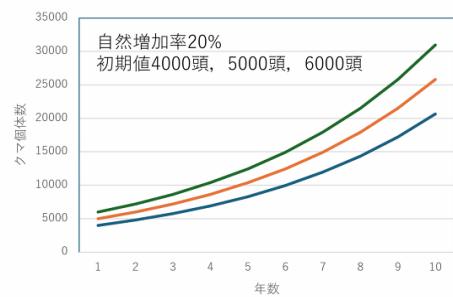
【白神山地】（秋田、青森）

【北奥羽山地】（秋田、青森、岩手）

【鳥海山地】（秋田、山形）

秋田県全域での推定中央値4,400頭（2020年4月時点推定）

クマの増加予測



シカ 222万頭（2021年時点）

※北海道を除く



イノシシ 72万頭（2021年時点）



◎世界でもっとも広く分布するヒグマの総数約11万頭、日本のヒグマ12000頭、ツキノワグマは45000頭+？
◎世界中でツキノワグマが増えているのは日本だけ
ツキノワグマ 4万5千頭+？

5 多角的視点の大切さ

森の復活とか個体数の増加とか、クマ被害増加の要因はそれだけではなく、事情はそう単純ではなさそうです。各都府県の地域的事情も異なりますし、クマの個性も様々なのだそうです。

ドングリの豊凶との関連や、広葉樹林に関する考え方（現況、将来）も色々あるようです。

すっかり耳に馴染んでしまった「アーバンベア」とは、都会などヒトの生活エリアに出没するクマのこと。アーバンベアが増えていることの一因として、奥山では、力のある（主にオス）個体が陣取ってしまって、弱いメス個体や子グマは人里に出て行かざるを得なくなつたとの見方もあるようです。そして、山中よりも人里や都会などアーバンベアによる被害が多いのだとか。

クマの学習能力が極めて高いことは、かなり重大な要因と言えそうです。新たに美味しい餌や、餌のある場所を覚えてしまう。このことはアーバンベアに限ったことではなく、登山対象エリアなどでは以前から言わされていました。ヒトが怖くないことを学習してしまった、との見方も。

人里近くでの生活を覚えてしまったクマは、冬ごもりのエリアも同様のようです。そもそもクマの冬ごもりでは、何かの刺激で眠りから覚めやすいとか、冬ごもりの途中でも場所を変えることがあるそうです。また、食べ物がある限り冬眠しない可能性もあるようです。

東北地方などでは、風力発電設備の建設の影響もあるのではないか、との見方もあるようです。

いずれにしても、私たちは、多角的な視点から理解し、考えることが大切だと思います。短絡的で偏った考え方は、私たちの未来を誤った方向に導きかねません。

ところで、以下は千葉県のクマ事情に関する読売新聞の記事です、ご参考までに。

<https://www.yomiuri.co.jp/national/20251226-GYT1T00389/>

6 軽井沢町の取り組み ~「クマと人の共存」のために~

クマ被害対策としては、以下のとおり、環境省が「クマ被害対策パッケージ」を示しています。

<https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort12/kuma-oshirase-r071114-3.pdf>

ここでは、別荘地として有名な長野県軽井沢町での取り組みを紹介します。

同町は、1990 年代よりクマ対策に取り組み、2000 年よりツキノワグマの保護管理を民間団体「ピッキオ」に委託しているそうです。目標に掲げている理念は「クマと人との共存」です。

同団体の取り組みの一つが、クマの個体識別と「学習放獣」です。捕獲した個体ごとに DNA 解析とカルテ作成。そして発信機を取り付けて個体ごとの動きを把握します。放獣の際には、ヒトに対する恐怖心を植え付けるため大声を出したり花火で威嚇しながら山に帰す「学習放獣」を行います。

「ベアドッグ」の導入は、2002 年から準備を始めました。ヒトによる「追い払い」ではクマが慣れてしまつたこと、そしてクマの行動は夜間に多く危険を伴い、ヒトだけでは限界があることが導入の理由でした。導入のためスタッフが先進地のアメリカにわたって技術を学んだそうです。「ベアドッグ」の能力、効果は衝撃的なほどだったそうで、クマに「越えてはいけない境界線」を教えます。

この取り組みの最も根本的で重要な考え方は「ゾーニング」です。クマの生息地である森林エリア、追い払いを行う別荘地エリア、ヒト優先の居住地エリア、電気柵で防除する耕作地エリアに分け、エリアごとに対策、方法を検討、決定します。ヒトとの軋轢レベルが高い個体に限って駆除を行います。

今後の課題は、後継スタッフの育成とともに国内におけるベアドッグの繁殖、そしてそのための資金確保だそうです。

（記：茂原市 望月力智）



下見は順調なれども

1月11日に昭和の森の野鳥観察会を担当するので、その前の5日に一人で下見をしました。野鳥観察の場合、下見をしても鳥は何時も同じ場所にいる訳はないので、その年の全般的な傾向とルートの安全確認が出来れば良いと決めていました。当日も1時間以内にさっさと下見を済ませるつもりでした。それでも運よく撮影できるような鳥がいるかも知ないので念の為、望遠レンズ付きのカメラも担いで歩きました。結果は以下の通りです。思いがけない成果でしたが、当日は強風で期待外れの結果に泣く。



モズ 雌



モズ 雄



アカハラ 2羽



シロハラ アカハラのにらみ合い



メジロ



コゲラ 飛び立ち

佐倉市 坂本 文雄